

江戸時代の商業と流通

(平成七年十一月十日講演)

今日は、十七世紀の頃の佐渡と越後諸藩との関わりあいについて、商業と流通の面からお話してみたいと思います。

なぜ江戸時代でも、十七世紀の頃を取りあげたかと申しますと、ご存じのようにこの世紀は世の中が激しく変わった時代でありまして、とりわけ生産社会のありようがすっかり変わったことです。一口でいうならば、銀による貿易の時代から農産物を商品として生産する時代になったといえましょう。私どもは往々にして、時代が変わった、などと口では簡単に言ひがちですが、変わっていった原因を先ずしつかり把握しなければ、時代の変化に十分対応出来ないと思います。

佐渡がほかの諸藩と異なるところがあります。自然的条件が異なるのはあらためて申すまでもあります。人が、人為的条件と社会的条件が際立つて異なっております。平たくいえば、佐渡が幕府直轄の天領であるために、他国のように国をとりしきる藩主がいなかつたということです。

このことは、佐渡の人がいろいろな物を考えるときの考え方には深い影響を及ぼしているように思います。藩主のいた高田や長岡の人達とは、物を見る角度が明らかに違つております。例えば、何かこれまでと違つたことをいざやるとなると佐渡の奉行所は藩と違つて後押し不出来ないし、またやってよいかを決めることも奉行所では判断できないのです。率直にいえば、江戸時代の佐渡にとっては、藩であったほうが良かったのではないかと思われます。

さて、江戸時代の初めの頃は越後と佐渡とでは明らかに佐渡が中心でありまして、今でこそ中心は新潟と言いますが、それはずっと後になつてからです。江戸時代以前は柏崎が中心であつたようです。なぜ佐渡が中心になり得たかといいますと、相川に鉱山が出来たからです。文禄四年（一五九五）に坑道掘り（間歩^{まほ}）と呼ばれる新技术によって金銀鉱山が生れましたが、この繁栄によって他国から人が集まり、その後元和年間（一六一〇年代中頃）には四、五万人の人口規模にもなりました。また、産出された「銀」

はどのくらいかといいますと、慶長六年（一六〇一）に家康の手元に届いた銀は一万貫という記録があり、「金」に換算して二十四万両、江戸時代を通じて一番多い量であります。これは百万石といわれた加賀の前田家が一年間で取得する年貢二十五万両に匹敵し、またこの年の佐渡の百姓から上がる年貢が銀に換算して三百七十五貫、相川から出た銀の価値はその三十倍にもなるのですから、凄さがお分かりいただけるかと思います。このような飛躍的な繁栄をもたらしたのは、佐渡の初代代官として赴任した敦賀の豪商田中清六が、これまでの一山請負の運上請負制という方法から間歩ごとに短期間の運上額（上納金）を入札によって決めて稼がせる、という画期的な開発手法をとつてからです。

ここで大事なことは、家康の手元に入った銀一万貫は、実は生産量の三分の一であって、残りの二万貫は山師以下鉱山労働者の懐に入ったということです。秀吉、家康の頃のことを書いた『慶長年録』という本の慶長十七年（一六一一）のところに次のようなことが記されています。

「其のころ佐渡国に金山繁昌して、京・江戸にも御座無きほどの遊山見物遊女など充満す、国々より来る金ぼり町人などが、かようの遊興にふけり、もとでを失ひ候て悉疲れ、國本へ帰ることなき者數を知らず、身持よくして帰るは十人に一人也、然る間佐渡へ参り候者、三年約束仕り、三年過ぎ候得ば最早皆死に候と存じ候也」

つまり「佐渡へ行つて三年帰らなかつたら、死んだと思え」という記録であります。そのため一般的には、相川の鉱山は悲惨なところで慘めな死を遂げた人が大勢いるという、悲惨な面のみを強調されがちですが、普通の百姓では到底手に入らない程の大きな金額を手に入れるという、大きな富の魅力が山師や鉱山関係者達をとらえて、帰宅の意志をなくしたとも考えられるのです。このような観点からすれば、「鉱

山労働者には先々の考えがなく、毎日美味しいもの良いものを食い、豪遊して身を滅ぼした」などという倫理的な見方だけでは事の本質を見失うのではないかと思ひます。

専門家の調べによると、当時、銀は佐渡のほか石見（島根）、伊豆でも産出されておりまして、世界の銀産出額の四分の一は日本のものであったといわれています。そのことは、例えば貿易の中心であったオランダのアムステルダムで、日本の「両」という単位を使う貨幣交換所が出来て、その中でもサマ（佐摩：石見）とセド（佐渡）の銀が重きを占めていたことでも知られます。そうすると、どうして金ではなくて銀が輸出されたのかという話になるわけですが、当時中国の明朝は日本との貿易を禁じておりましたから、オランダやポルトガルの船が中国の生糸などを日本に運んできて、その代金は全て銀で決済しておりました。それというのも、その銀がないと日本に輸入する中国の商品が市場で買えなかつたのです。勿論、彼等とて銀がなかつたわけではありません。既にイスパニヤでは、十六世紀の終り頃（慶長期の初め頃）、



水金川

銀の精練では画期的な水銀アマルガム法(1)というものが開発されておりまして、徳川家康も興味を示していたことは、よく知られた史実です。ちなみに相川の水金町は、大久保長安によるこの水銀精練施設の名残です。

彼等は東南アジアから商品を持ってきて、帰りに、その商品を買うために日本から銀を持っていったのです。こうして何万貫という銀が幕府の手に入ると、堺や長崎を通して銀そのものが南方に輸出されていったわけであります。最近では慶長の頃、逆に長崎から佐渡へ大量の生糸が送られてきたという資料も見つかっております。

しかし明朝から清朝に代りますと銀でなくても貿易ができるようになつたことや、江戸時代も中頃には日本の金銀山も衰退の道をたどるようになつたことなどから、金銀という資源輸出での繁栄は終りを告げることになります。

(注1) 水銀アマルガム法：水銀の他の金属との合金（アマルガム）を作りやすい性質を利用した金・銀の精錬法で、慶長十年代に佐渡で試みられたが、後に家康が禁止。明治期になつてまた佐渡、生野などの鉱山で実施された。

鉛灰吹法：銀鉱石に鉛や鉛鉱石を吹きあわせて含銀鉛にし、灰吹皿（灰吹炉）によつて銀と鉛を分離する精錬法。中国、朝鮮で行われていたものを一五三三年（天文二）に石見銀山で採用し成功、以後日本の銀生産、輸出が急増した。

さて、このような鉱山の富が当時の社会に一体どんな影響を与えるか、変化をもたらしたのでしょうか。私は、一つには田地の大開発であり、もう一つは港の出現ということに要約できるのではないかと考えます。

『佐渡年代記』という本によりますと、慶長九年（一六〇四）の佐渡の米の値段は銀一匁（三・七五g）

に米七合で、鉱山労働者の日当も同じく米七合、これは当時非常に高い値段でした。ちなみに十年後の出雲崎（相川鉱山の渡海場）では、銀一匁で米六升ですから八、九倍の高値が相川で出現したのです。このような高値でも米が買えるのは鉱山関係者の収入が良かつたので、高値でも売れたということでもあるわけです。普通、米は貨幣に代わるものと言われ、またそう思われてもきましたが、江戸時代の初期は米の流通が悪く、それがひいては米の生産にも響いて、米の出来ない地方は米以外のものを食べていたと思われます。このように佐渡の相川で他国の八、九倍もの値段で米が売れるとなると、経済や社会に様々な影響が出てくるのはむしろ必然だろうと思います。

先ず他国から「米売り船」がやってくるようになります。そして当然こちらからも買いに行くという同時現象が起こり、田地の開発も促進されることになるのです。わが国では数回、田地の大開発の時代がありまして、その一つが慶長、元和、寛永の時代です。鉱山や城下町が出来て、大消費地が出現することに

なるので高い米でも大量に買う状況が発生したのです。

そして佐渡でも新田の大開発を引きおこす時代を迎えたのです。ご存じでしょうか、例えばバスの小木線の途中にある西三川や背合、海府線の相川から姫津にかけての段丘の上の田圃は、この頃に開発されたものです。

慶長五年（一六〇〇）の記録によりますと、佐渡の年貢の総額は二万石であって、おおよそ一万五千人の人が食べる米しかなかったんです。その後慶長から元和にかけて相川に集まつた人は四万五千人土九千人に達し、新潟が精々、千軒、五千人の規模だったというのと比べても大変な規模の消費地が出現したのです。

ここで、人口と米の需給の関係を少し整理してみましょう。

佐渡の年貢で一万五千人を賄うとしても、三万人分の米が不足することになります。当時の一人の米の年間消費量はおおよそ一石五斗ですから、三万人では四万五千石が不足することになります。しかし江戸時代はどこの藩でも年貢はとるけれども、実際に売りに出せるのは、その一割しかなかったといいます。ですから、越後で四十五万石というのは生産額のことであって、年貢として入るのはその三分の一の十五万石で、しかもそのうち売り出せるのは一万五千石ということになります。結局、越後の米の供給力は一万五千石しかないので、不足する三万石についてはほかで補わねばならず、北は津軽、そして出羽や越中からの各藩の供給によつたものと思われます。かくして各藩は、米を作つて佐渡へ持つていけば藩財政が潤うというインパクトに支えられて新田の大開発時代を迎えることになったのです。

この大開発時代に起きた有名な事件として高田藩の「越後騒動」があります。

高田藩は越後一の大藩でしたが、寛永年間（一六二四—四三）の頃、直江津・柏崎間の湿地「大瀧新田」^{おおたきしんた}の開発に着手して八千石の収穫のある新田の開発を成功させました。この事業は湿地の水を抜いて干拓す

るもので、工事には大変な困難を伴ったといいます。このような工事をやるには新しい知恵と頭脳が必要なことは言うまでもありません。高田藩では、開発したらその利益の十分の一を開発者に与えるという新しいインセンティブを考え出したのです。それで、開発の請負人を募集すると、群馬の藤岡から大勢やって来たので高田の商人宮島作右衛門は、この人達に開発の資金を貸付けて、成功したときは報酬を与える、という取決めをしたのです。そして事業は成功したのですけれど、これは幕府の奨励によつて実施されたのではなくて、高田藩が独自に考え出した仕組みによるものでした。

この新田開発事業は寛永年間（一六三〇年代）は大成功を収めるのですが、一六八〇年代、將軍綱吉の頃になるとうまいかなくなるんです。一六五〇年代には恐らく銀の産出量が減ったためでしょ、佐渡鉱山では人もいらない、米もいらないという時代が到来して、米過剰のため米の値段が下がるという状況になつてきたのです。しかし、こうなつても高田藩では新田開発事業を続けたのですが、何しろ新田開発というのは二十年から三十年も要する大事業だったからでもあります。

この頃登場するのが、騒動の主人公となる家老小栗美作で、美作はとうとう藩のお金二万両を新田開発継続につぎ込むことになつてしまい、また江戸の豪商河村瑞賢に頼んで福島県境の白峯銀山の開発にも着手して藩の多角經營に乗り出したのです。ところで、彼が不運だったのは、開発完成期が米の値段が下がった時期とぶつかり、新田からの米の収入と開発費用とのバランスを大きく崩したうえに、寛文五年（一六六五）の高田大地震の追討ちが加わり藩財政が逼迫したのです。このため、開発反対派の次席家老の荻田主馬だいしゃくめと施策のあり方をめぐって確執、騒動にまで発展したのです。幕府に訴えられ、裁判の結果、小栗美作父子は切腹、藩主松平光長は改易、荻田主馬は流罪となつたのですが、綱吉の裁定は生涯この一回だけです。

似たようなことは、何もこの時代に限らず現代もある話で、うまく行つているときは何も云わなくて、一寸でも状況が悪くなるとすぐ「責任をとれ」、と騒ぐのが日本人の通弊であることは、皆さんもよくご存じの通りです。

存知のとおりです。

この騒動は、小説では美作は藩のお金を使い込んだ悪人であり、主君の松平光長は暗愚であると描かれ、また、一般には幕府の画策によるものといわれますが、実際のところは佐渡に振回されたということがであります。もし、佐渡の米の値段が越後の八、九倍もしたということがなかつたら、恐らく彼は新田開発に熱中するようなことはなかつたのではと思われます。

以後、高田藩は明治維新まで藩を維持するというだけで新しいことは何もしなかつたのです。

このような佐渡鉱山の盛衰が諸藩にもたらした影響は米ばかりではありません。他の生産資材や消費資材を売ったところも鉱山の影響をうけております。皆さん「ベエタ」という言葉をご存じかと思います。薪のことを佐渡ではこう呼びますね。私は薪を指す佐渡の方言だと思っていました。この「ベエタ」は主に山形庄内から入ってきました。越後では「コロ」と言い、「ベエタ」は庄内から仙台にかけての東北地方のたきぎの用語です。当時大量の薪が入ってきましたので、それまで佐渡では何と呼んでいたかは分りませんが、他所からの言葉である「ベエタ」が今日に至るまで使われております。また、塩は主に能登地方から輸入されています。

燃料の炭については、実は大変なことが起つておりまして、たかが「炭」というなけれ。

佐渡鉱山で精錬などに消費される炭の量は年間七、八万俵にも上つており、このためこれを供給していいた越後の米山が裸の山になつたと云われています。このことは古くは平安遷都による京都の山やオンドル用燃料として使われた朝鮮の山、戦時の我国の山の荒廃の例によつても決して大袈裟なことではなく、容易に理解できるかと思います。しかも鉱山の精錬使用する炭というのは白炭という良質のもので、長さが三尺通つていないと使えないんです。この白炭三尺ものの炭を焼くために、中世からの特殊技能者「炭焼き藤五郎」が活躍することになるのです。「藤五郎」は日本中、炭焼きの代名詞ですが、現在も「藤五郎堰」の跡が金井町の新保ダムの上に残っています。

さて、このように他所からいろいろな物が入ってくるようになると、相川に港が築かれるという、特筆すべきことが起つたのです。そして寛永五年（一六二八）には姫津や二見にも港が築かれました。相川に向けて物資を積んで来て、またそこから積まれていくということですから、これらの港が出来たために様々な影響が出てきました。それまでは中世以来、沢根の港だけでした。この港はバスの本線で相川へ向うと沢根の町をはずれて右へ曲がるあたりのところ、現在質場（しつば）という地名が残っているあたりにあって、川港でした。秀吉時代、伏見城の築城に際して沢根甚助（「浜田屋」と称した）という当時佐渡一の回船問屋が、大坂に秋田杉を運んだといわれています。沢根港が佐渡を代表する港だったのです。

こうしてみると伏見城築城は一五九〇年代のことであり、早くも一六〇〇年代には相川、姫津、二見港の時代を迎えるですから、その移変わりは凄まじいものだと思います。

ここで、相川の港のことを少しお話してみたいと思います。



大久保長安像(刷・大特)

慶長八年（一六〇三）大久保長安が代官としてきますが、彼に招かれて石見（島根）の大森からやってきた吉岡出雲や宗岡佐渡（むねおかさど）という人達が相川の町立てをした時に始まっています。彼等がいた大森銀山（大田市）というのは、温泉津（邇摩郡）という町から山へ三時間ぐらいかけて馬で物を運ばねばならないというような地形で、六つの谷底に鉱山の集落があつて、天文期（十六世紀後半）に洪水で流されてしまったというような場所です。彼等はこの銀山六谷の代官をつとめ、山師達の銀山経営を直接監督支配する役人でありましたから、銀山のことには明るかったのです。それで、相川に呼ばれた時に大森を教訓にして、一つは山の上に町を作ること、もう一つは前面の海を利用しない手はないと港を築くことを考えたのです。

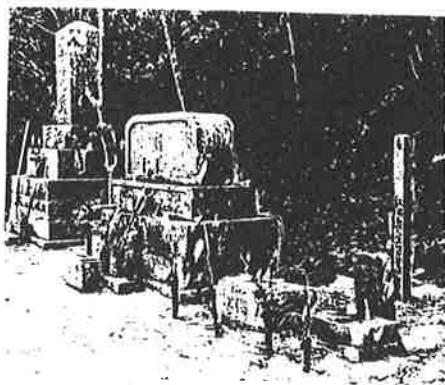
相川は自然条件からすると、沢根より決してよいとはいえませんが、それにもかかわらず長安がここに

港を開くことになったのは、一つには鉱山資材でも木材のような運搬しにくくて分割しにくいものがあったことや、他国から膨大な米をここに運ぶ必要があつたうえに、冬場は雪のため沢根から中山峠を越えて相川への輸送が不可能だったからなんです。ちなみに、この相川旧街道は明治になつて掘り割り新道が出来て、その後、この峠にトンネルが開通し便利になるのは大正十二年なつてからのことです。

さて、この港というのは、海の深さや風に關係なしに、必要のある場所にいつでも荷物を下ろせる「桟橋」を作るという画期的な発想でした。中世の佐渡では川に船を入れるということはあっても、「桟橋」の考えはなかつたもので、佐渡土着の人には考えられないことでした。そしてそこに十分一役所（陸揚物資の十分の一を取る）を設け輸入税を取る一方、各種の商品を扱う商人を招き寄せて商人町をつくって、鉱山に必要な生産や消費物資をスムーズに供給することになったのです。この港は埋立てられて、現在はありません。

余談になりますが、現在中山峠の頂上にあるキリストン塚は観光資源になつておりますが、作ったのは大江雄松おおえゆうまいう天主教の伝道士で他国人の人でした。このほか相川治助町の水替無宿人の墓など相川町はこれら山の上の観光資源を借景としているといえるのではないかと思ひます。先程申しました石見の宗岡佐渡のお墓は、沢根の真宗せんしゅう専得寺の山の上の墓地に建つております。

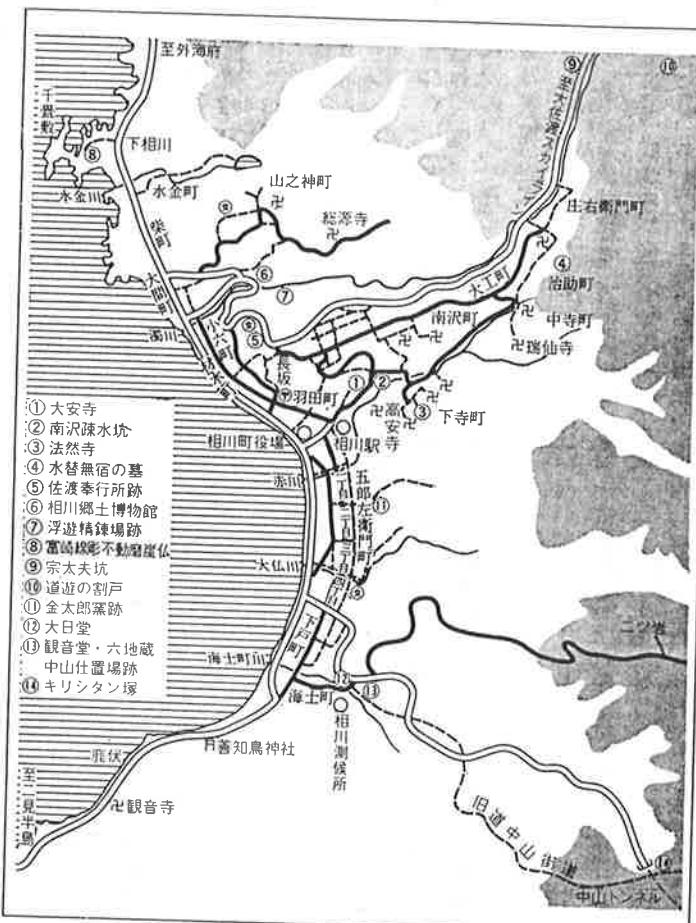
他に石見からやってきた人達が伝えたものに「カタセ」（スケトウ鰐を腹開きにして塩をふって干したもの）があり、それまでは筒鰐というものしかなく、初めてカタセを見たとき佐渡の人はびっくりしただろうと想ひます。カタセに類したものは方々にあって、新潟では「ボウ鰐」、京都では「正月魚」、東京では「新鰐」と呼ばれていますが、茨城の那珂湊より北のほうでは「丸もの」、西のほうは「開きもの」の傾向があるようです。また、姫津カタセと言えば従来は佐渡一とされ、旧金泉村（現相川町）には「石見」、「静間」せいまという姓が多いのも石見からやってきた人が大勢いたことを物語っています。



水替無宿人の墓(滋賀)



キリストン塚(中山峠)



相川町周辺遺跡分布図 (『歴史文化遺産』宮栄二、学生社)

以降、佐渡の港は幾変遷もして、小木のよかつたときもあれば、赤泊、夷が繁榮したこともあるのです。

ここで一寸、佐渡を離れて対岸の新潟港のことをお話しようと思います。

元和二年（一六一六）に当時の領主堀直奇ほりなおちという大名が初めて港を開いたもので、新潟町中に命じて、伝馬や通船の制をひいて、港を発展させるため「ここへ船が来たら、税金をとらない」という画期的な政策を打ち出しました。以後寺泊や柏崎に勝っていくようになるのですが、開港四十年後でも町はせいぜい千軒、人口五千人しかなかったのが、今では六十万人近く、この半世紀前、佐渡はすでに四万五千人（一六五〇年代は一万人）、その中心地相川と比較して今昔の感ひとしおというところです。

さて、こういう風に佐渡へいろいろの物資が集まるようになると、これを扱う廻船商人が生まれることになりますが、これには「クセ」があるのです。船の性格、權けんの癖ともいってよく、北は出羽、南は能登との間を守備範囲としたもので、それが限界、それ以外は行けないと云うのもクセであつたのです。

この頃成立した廻船商人に、松ヶ崎の菊池喜兵衛（日蓮宗本行寺を一人で建立した）や小木の風間長左衛門がおります。しかし繁栄の期間は短かく、その原因は経営が悪かったからだともいわれますが、ただ越後と佐渡間の物資輸送（御城米輸送）だけという片側航海なので、効率は悪かったと思われます。そもそも、寛延三年（一七五〇年）まで佐渡奉行所は国産品の他国出しを禁止しておりました。これは、「佐渡の産物を他国に売ると、自分のところの物が少なくなつて値段が上がりつて困る」というもので、今考えれば随分おかしな理屈です。寛延三年以降も、鉢山で物が足りなくなつたら他国出しを禁止する、という条件付の消極的な他国出しでした。

他藩では特産物の生産に励んで藩が専売奨励で他国へ売ることに懸命になつてゐる時に、佐渡ではこんな状況でしたから、経済史でいうような重商主義なんてものはなかつたんです。明治になつていきなり資

本主義の洗礼を受ける羽目になつたので、これが尾をひいて、「佐渡人は物を作つて売るのが下手だ」と云われる最大の原因にもなつてゐるのではないかと思われます。

このような片側航海の時代が終りを告げると、やがて仲介貿易を行う廻船商人が出現します。外海府岩谷口の舟登源兵衛（子孫は民宿經營）や夷の本間儀左衛門（本間旅館）などです。彼等は、例えば新発田の米を敦賀に運ぶという風に、自分の居所（佐渡）に関係なく、一番利益の見込めるところならどこへでも出かけて行つております。源兵衛の場合、あの辺鄙な岩谷口でと思われがちですが、あの辺りは人件費が非常に安かつたんです。あの「おしん」の男版といったところで、食い減らしのため余った男を搔き集めて養子にし、三、四年で船乗りに速成して、十四人必要とされる千石船に乗込ませるというやり方で、居所なんかは関係なかつたようです。一方、本間儀左衛門のほうは、下北半島の田名部（たなべ）というところで船を作つたという記録があり、彼は北のほうの船が強いということを信じて仲介貿易をしたものと思われます。

話を港のことに戻します。

小木港は、寛文十二年（一六七二）将軍家綱の頃に、「内の潤^ま」と「外の潤」を結ぶ堀が作られたのが始まっています。この堀を利用して船が移動すれば東風のときでも西風ときでもうまく風を避けられるという利点があつたため、遠洋航路の船待ち港としては最適でした。青森や北海道から大坂への航路（北前航路）の「寄港地」として発展していくのですが、残念なことにここから各地に積んでゆく国産品、つまり売る商品がなく、ただ寄港・休憩をする港となつたのです。それで十九世紀の初頭から船乗り相手の芸者町として栄えていくことになります。

少し横道にそれますが、芸者には二つあります。「芸者」と「飯盛り」とですが、芸者は船問屋で船主や船頭の相手をし、飯盛りは「コヤド」で水夫（カコ）の相手をするという、厳然とした階級の相違があつたといわれています。

この芸者達は独特の気風を持っていて、嫌いな客なら断る、いわば選客の自由を飯盛りでさえ持つておらず、好いた相手のところに泊まるときは、飯盛りでも布団を持っていったということです。



東・西廻航路図（『新編歴史』山川出版社）

また、小木では女の子が生まれると千両、男の子は五百両と云われ、国仲方面とは逆であったといいます。それでも芸者になれるのは女の子なら誰でもというわけではなく、良家の子女でないとなれなかつたそうです。最盛期には三百五十人の芸者がいたそうですから、とても信じられないぐらいです。そして、小木では船待ちをする船乗りを歓待するため他国の唄を覚えて、歌う必要があり、能登の「そうめんさん節」や「大津絵節」や「追分」など（本稿末尾参照）が移入され、歌われて、現在なお独特的の節として残っています。

往時の繁栄ぶりがうかがえます。
そのほか「石カケ」といつて、海岸で一日中石を投げていて船が姿を現わした時、帆の印で何処の船かを見分けて宿屋に知らせて褒美にお金を貰うといった職業もあったといいます。

余談ですが、大坂に佐渡町という名の遊廓の町があったと伝えられていますが、当時新潟や寺泊や出雲崎では廻船を持っていませんので、北前貿易での佐渡の船が目立ち、ひいては町の名にもなったのではないかと想います。

一七七〇年代以降は、宿根木や夷（両津市）の港が栄えることになります。宿根木は仲介貿易ではなくて、佐渡産の年貢米を大坂に運んで栄えたところですが、夷は慶長年間に奉行所が鮭をとるための村として開発したのが始まりで、加茂歌代から夷神社を移して祭って地名としたもので、「蝦夷」とは関係なく

他の港町に比べて新しいところです。

以上のように佐渡の港は大坂との関係が強まつていったのです。

一方、越後はどのような道を歩むことになったのでしょうか。

明暦の頃（一六五五—一六五八）、高田藩は、最早佐渡へは米が売れないことから江戸へ売るという計画をたてます。江戸の人口は十七世紀初めは三万人くらいでしたが、一七〇〇年頃には都市として、世界一の百二十万人に膨脹していましたので、大変魅力的な消費地であったからです。それを実現するルート開拓のため、信濃川を溯り清水峠の頂上から上州宝川へ下りるところに（絶壁になっている）、トンネルを掘って江戸への道路を造るという雄大な計画でした。この計画書は現存していて、もしこの道路が完成していたなら、新潟県の経済、都市の発展は現在とは相当に違つたものになつたであろうと想像させられます。しかし、この計画はついに成功には至らず、「新潟では男と杉の木は育たない」という言い伝えを生ずることにもなつたのです。

以下、この経緯をかいづまんでお話します。

まず、この計画に六日町や塩沢など三国峠のほうの村々が反対して上州沼田までの地域大連合を組織、結束して反対に立上がりました。これまでの既得権の流通経路（三国街道）がなくなるからです。また越前敦賀、小浜のほうは、これまでの大坂航路がさびれるという危機感から幕府の評定所へ訴え出たりしたのです。

このような情勢で計画実現の鍵を握ったのが、直接の関係がない新潟だったのです。その頃の新潟は、まだ閑屋や白山の辺りの寒村で学校町辺りにただ倉庫が並んでいるような、取り立ててどうということもないところで、川べりが発展するのはもっと後になってからです。

新潟では、二つの意見に分かれていました。一つは北海道や東北の荷物を十日町までは信濃川の水運で、

それから先は陸運で江戸へ運べば大きい利益が得られる、というものでした。もう一つは、大坂への廻船を當んでいる側で、道路が完成すると廻船による既得権を失うので不利になるというものでした。協議の末、どつちに転んでも損はないということから、「新潟はどちらでもよい。新潟が主力になつて事を進めることはやらない」という態度を取つたことが大きな原因となつて、高田藩の計画が画餅に帰したといわれております。

新潟は元来地の利がよく、何もしなくともそれ相当に発展する都市で、他の地方のように不況や不利な状況をバネにして道を切り開いて行くというような経験がなかつたので、先程の「新潟では男と杉の木云々」の言い伝えが残つたものと思われます。

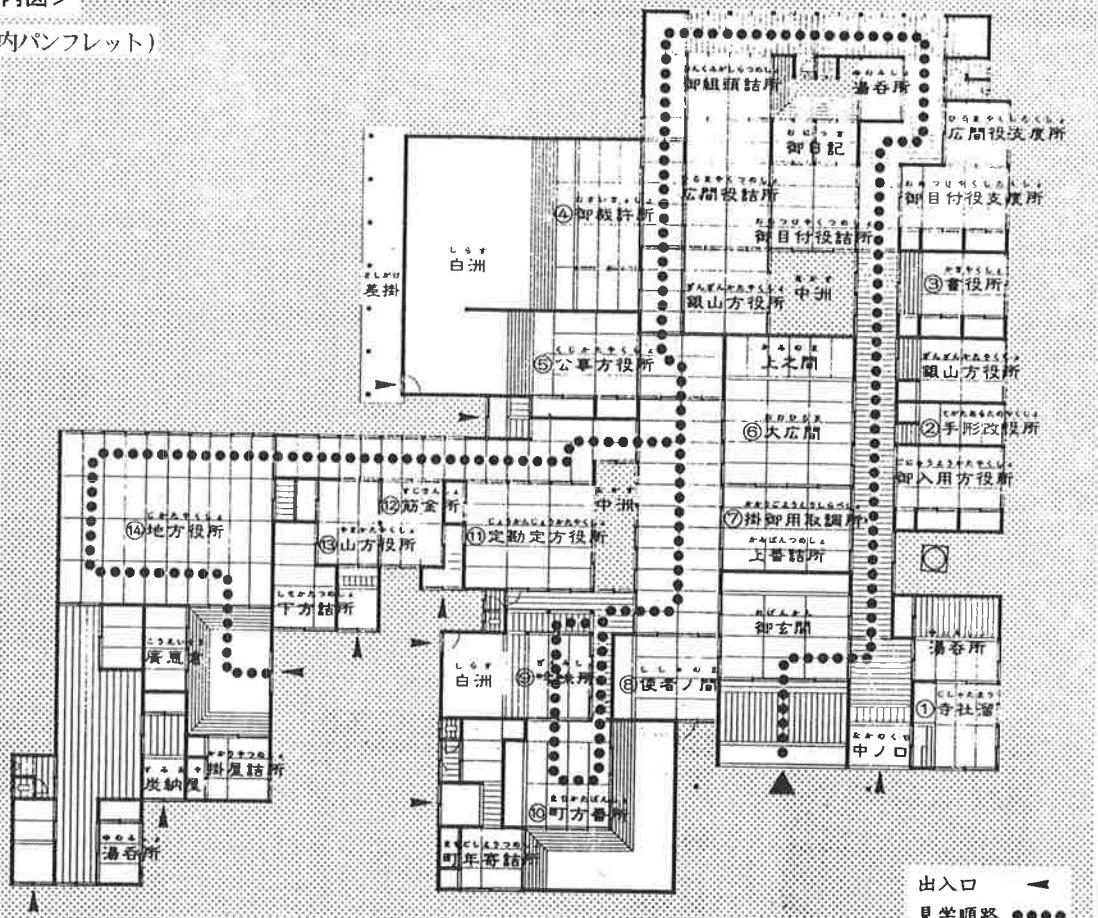
(一)



佐渡奉行所（一部復元公開）

<案内図>

(案内パンフレット)



(参考) 「そうめんさん節」(盆踊唄)

民謡の形態は日本全国どのものでも皆「七・七・七・五」の二十六音、この七音を削除した「七・七・五」の十九音の特異な形態が「そうめんさん」である。短歌の上十七音が独立して俳句になつたのと似ている。

「そうめんさん節」の「そうめんさん」は「素麺さん」で、代表的な歌詞の文句からとつた俗称で踊り方は「さし踊り」といい、韻律は海府甚句に近い。海府甚句は両津甚句と同一系統のリズムかあって、それよりもっと素朴でテンポが遅く民謡独特の哀調が一段とはつきり表現されている。

能登の輪島や蛸島が素麺の産地で有名だった。輪島は慶長・元和頃から有名で、大和の三輪、能登の輪島といわれ、天保頃には漆器に劣らないほどの素麺の製造者がいたが、安政の頃衰えたといわれる。

そめんさんの出ど」 能登の輪島か蛸島か

そめんさんの出ど」 西が雲れば雨とやら

「小木大津絵節」(祝儀唄)

佐渡では宴会の席で小木出身の芸妓によつて必ずといってよいほど唄われ、踊つたそつである。端唄の大津絵とちがつて、古風な説経節の道行きのようで非常に優雅な感じがするものだつたようです。明治も末頃からだんだん唄われなくなつていつたようである。歌詞は小木の春宵を唄つたものなどを以下掲げる。

「春宵を唄つたもの」

小木の潤の春の夕景色 風も匂ふや御所桜 城山のおぼろ月みはる向うの越し雪 沖のはせ舟が霞がくれに真帆片帆
内と外とのかかり舟 向う岸の弁財天 矢島経島 若やぐ木崎の下り松 三島向島中の島 四方を見はらす日和山

〔忠臣蔵・梅川忠兵衛〕

大阪を 立ちのいて わたしの姿が眼にたゞ借駕籠に 身をやつし 奈良の旅籠や 三輪の茶屋 三日五日と日を送る
廿日余りに四十五両遣い果して一分残る 金より大事な 忠兵衛さん 科人いたしましたはわたし故 さぞやお腹も立
ちませうが 因果づくぢやと あきらめ下しやんせ

「小木追分」(祝儀唄)

信濃の追分の馬子唄が「越後追分」となり更に「松前追分」となつたといわれるが、この「小木追分」は「松前追分」以前のものであろうといわれている。

めて(右手)に経島ゆんで(左手)に木崎 沖に白帆が二つ三つ
来るか来るかと上沖みれば 箭島経島影ばかり